

『十地経』における adhiṣṭhāna (加持) の諸相 ——第十地を中心として——

平 賀 由 美 子

1. はじめに

『十地経』において adhi-√sthā という動詞は序章箇所と八地以降に見られ、いずれも「菩薩の三昧 (bodhisattva-samādhi)」上にのみ説かれる。それは従来からの功用 (sābogha)・無功用 (anābhoga) の問題を説く手がかりになると思われ、結論を先に言えば、第七地の終わりにおいて菩薩が入る「善く思忖された観察 (suvicitavicaya)」と名づけられた三昧を契機として無功用なる状態と捉えられ、この菩薩の三昧上の無功用なる状態において、菩薩を行為主体とする加持が八地以降に行われると把握される¹⁾。

第八地の冒頭に「如来の加持がよく加持されている (svadhiṣṭhitatathāgatādhiṣṭhāna) 菩薩」という一文の、その如来の加持とは序章にある「世尊なるヴァイローチャナのもつ本の誓願なる不可思議な力 (加持) (bhagavato vairocānasya pūrvapraṇidhānādhiṣṭhāna)」に根拠がおかれ、つまり菩薩は釈尊に連なる諸如来たちのもつ誓願に基づいた加持がよく加持された菩薩となって、菩薩を行為主体とする加持へ移行する。本経の説く、菩薩を行為主体とする加持とは、自己の身体 (sthāna:svakāya) の上に (adhi)、菩薩の保持する誓願に基づいたはたらきを行うことであるが、まず第七地に入る菩薩の三昧上の無功用なる境界における「無量なる認識対象を観察した覚智 (apramāṇajñeyavicāritayā buddhyā)」によって、衆生に対する利他を願うがままに加持がなされる (八九地)。そしてその観察がよく決忖 (suvicitavicaya) し、第十地に至って更に「離垢 (vimala)」等の菩薩の三昧、「一切智者の殊勝なる智慧の灌頂 (sarvajñajñānaviśeṣābhiṣeka)」という菩薩の三昧を目のあたりにする (āmukhī-bhavati)。それは菩薩が「一切智者の殊勝なる智慧の灌頂」を受けられることを示すものであり、この境界から加持がなされる。以上から同じ三昧上であっても八地九地に行われる加持と十地で行われる加持とは相異が認められる。

これらの諸問題を念頭に入れて、第十地における菩薩の加持に至る過程とその

(142) 『十地経』における adhiṣṭhāna (加持) の諸相 (平 賀)

諸相について検討したい。

2. 第七地における菩薩の三昧—無功用なる境界—

本経で金剛蔵菩薩が菩薩の三昧 (bodhisattva-samādhi) に入る (sam-ā-√ pad) のは序章と第七地のみである。序章では「大乘 (大智慧) 光明」と名づけられた菩薩の三昧、いわゆる「法体の三昧²⁾」へ入り、諸如来たちの加持等が示される。そして金剛蔵菩薩は三昧から立ちあがり、諸如来たちの誓願なる加持と決定された誓願をもつ菩薩が進む十の菩薩地・諸仏の智慧地の階梯が端的に叙述される。しかしそれは仏の威神力 (buddhānubhāva) を受けて入ること、本経の趣意を示す「法体の三昧」であることを考慮すると、第七地に至って初めて菩薩の三昧に入ると理解される。

本経では初地から第七地までは各地の徳目を具足するべく、各々菩薩地 (bodhisattva-bhūmi) を進むことが説かれるが、初地から二地に進む際は、「第二菩薩地を希求し (abhi-√ laṣ)」、二地以降は「菩薩地に入る (ā-√ kram), (ava-√ tr)」とある³⁾。そして第七地において、前六地までに具足した六波羅蜜と方便・願・力・智を加えた十波羅蜜、更には一切の菩提分法 (四摂法, 四加持, 三十七菩提分法, 三解脱門) が刹那ごとに完成されるという。その理由として初地より第七地に至るまでに菩薩が実現した智慧を実現する徳目は、第八地より始めて、完全な究極に至るまで無功用 (anābogha) なる状態において実現されると説く。即ち第七地に止住した菩薩は一切の菩提分法を等しく起こし、一切の菩提分法が刹那ごとに完成されるに至り、止と観とを觀じ、第八地以降の法流へ入るべく「善く思忖された觀察 (suvicitavicaya)」と名づけられた「菩薩の三昧 (bodhisattva-samādhi)」に入る (sam-ā-√ pad) のである。それは初地以降、順次、菩薩地の徳目を修する為に菩薩地に向かって進むことが無くなる状態 (無功用) であり、序章において示された「法体の三昧」の境界へいよいよ金剛蔵菩薩が入ることを意味する。

本経では続いてその「善く思忖された觀察 (suvicitavicaya)」等と名づけられた菩薩の三昧について「(前六地及び第七地で修した) 方便と般若とによってよく浄められた」三昧であるとし「これらの三昧の獲得と (諸如来たちの) 大悲の力によって、声聞・縁覚の地を超え、般若と智慧とによって思量する地 (prajñājñānavicāraṇābhūmi) を現前する」(DBhS 121, 5-7; R60, 7-9) という。それはこの「菩薩の三昧」に入った菩薩がその無功用なる境界に至る第八地を目のあたりにすると理解され、そして本経では「菩薩の身体と言葉と心のはたらきは無量となる」こと、それは「自

己の覚智の境界を観察するを得るが故 (svabuddhigocaravicārapratilambhād)」と説く (DBhS 121, 7-16; R60, 11-21). そしてその「自己の覚智 (svabuddhi)」は八地以降は「菩薩の覚智 (bodhisattva-buddhi)」として説かれる。

3. 菩薩の覚智 (bodhisattva-buddhi) の進展

本経における菩薩を行為主体とする加持は、以上の「善く思忖された観察」と名づけられた菩薩の三昧上の「菩薩の覚智」に基づいて行われる。ここではまず無功用なる境界へ至った第八地以降から第十地における「三昧の現前」までの進展過程をみてみたい。

第八地において「菩薩の覚智」という語が初めて現れ、「偉大で巧みな方便と智慧とによって実現されている無功用のまま流れでた菩薩の覚智によって (mahatyopāyakausālyajñāna-abhinirhārāṇābhogaprasṛtayā bodhisattvabuddhyā)」 (DBhS138, 7-9; R67, 21-24) とある。第八地の菩薩はこの覚智によって一切智者の智慧を観察し、いわゆる器世間等のありようを観察し、了知して、自己の身体の上に誓願に基づいたはたらき・加持を行うに至る⁴⁾。これをふまえて第九地と第十地の冒頭に「この菩薩がこのような無量なる認識対象を観察した覚智によって (apramānajñeyavicāritayā buddhyā)」と説かれ、まず第九地について『十地経論』によれば「菩薩以如是無量智善思量智」とされ、その「無量智」は第八地に至った菩薩が実現した覚智を指し、その第八地の覚智は「善く思量している」と理解される。これに対し第十地では「若菩薩如是無量智善観智」とされ、第八地に至って得た無量智は「善く思量している」(第九地)から「善く観じた」(第十地)へ変化している。

さらに『十地経論』以降「観察が善く思忖され (suvicitavicaya)」という項目がこの一文に加えられ、即ち『十地経論』以降はその「若菩薩如是無量智善観智乃至第九菩薩地善擇智」に準じて訳される。そして「是中地方便作満足地分者。於初地至九地中善擇智業應知」(Br T26, 193c19-20)とあり、以上から菩薩は無量の認識対象をよく観察した覚智に基づき、(初地より)第九菩薩地に至るまでの行道を善く思忖し終えた覚智をもつに至って、第十地に入ることが知られる。

4. 第十地における菩薩を行為主体とする加持

金剛藏菩薩は第十地に入って、「離垢」等と名づけられた三昧が「現前 (āmukhībhavati)」し、そして「一切智者の殊勝なる智慧の灌頂 (sarvajñajñānaviśeṣābhiṣeka)」

(144) 『十地経』における adhiṣṭhāna (加持) の諸相 (平 賀)

と名づけられた菩薩の三昧を目のあたりにする (āmukhī-bhavati). そして菩薩はおおいなる智慧の灌頂の位を受け、「菩薩の覚智」も「智慧に随順した覚智 (jñānānugata-buddhi)」となる。また諸如来・応供者・正等覚者たちの入る智慧 (avatāra-jñāna) を菩薩は如実に知り、「このように実に諸仏世尊たちの広大な智慧は無量にして、この地に止住する菩薩の入る智慧 (avatāra-jñāna) もまた無量 (apramāṇa) である」(DBhS 187, 6-7; R 87, 33-35) とし、そして菩薩は、十種の菩薩の解脱 (bodhisattva-vimokṣa) をはじめとする百千の菩薩の解脱の無量無数を得、同様に百千の三昧、百千の陀羅尼、百千の神通 (abhijñā) の実現を得ると説く (DBhS 187, 12-188. 1; R 88, 7-14).

以上の過程を経て、第十地において菩薩を行為主体とする加持がはじめて説かれるのは次の箇所である。

DBhS 191, 6-12 (MsA mis; MsB mis; R90, 11-18) dharmameghāyāṃ bodhisattvabhūmau sthito bodhisattva ekasmin api lokadhātau tuṣitavarabhavanāvāsam upādāyacyavanāvakramaṇaṅgarbhasthit ijanmābhiniṣkramaṇābhisambodhanādhyeṣaṇamahādharmacakrapravartanamahāparinirvāṇabhūmir iti / sarvatathāgatakāryam adhiṣṭhāti / yathāśayeṣu sattveṣu yathāvaineṣikeṣu / ⁵⁾ また次に法雲菩薩地に止住する菩薩は、一世界において兜率天宮の住居から始めて、降下・入胎・胎住・誕生・出家・現等覚・勸請・大転法輪・大般涅槃に至るまで、衆生の意樂に応じ、教化される者に応じて、一切如来のなされた事を (諸の衆生たちに) 現わし示す (adhiṣṭhāti)。

ここでは加持の対象が諸仏諸如来たちの境界へ移行し、「衆生の意樂に応じ、教化される者に応じて、一切如来のなされた事 (sarvatathāgata-kārya) を現わし示す (adhiṣṭhāti)」と説く。つまり諸の衆生たちに、一世界において、或いは二以上の乃至不可説不可説の諸世界において、一切如来のなされた事、即ち釈尊 (をはじめとする諸仏諸如来たち) が成道・入滅に至るまでに歩まれた境界が (自己の身体の上に誓願のはたらきとして) 現わし示される。

続いて「彼はこのような智慧の自在 (jñānavasitā) を得て、善く思忖された大いなる智慧と神通力あって (suviniścitamahājñānābhijñā)」と説かれ、菩薩を行為主体とする加持が十四例叙述される⁶⁾。それについて『十地経論』では (Br T26, 199a1-4), 順次, a) 外界の認識対象・環境世界に対して狭く或いは広く変化させる (一例) b) 異なる他のものに変化させる (二例) c) 自在に転ずる; 一切衆生に種種なる莊嚴等を現わし示す (二例) d) 自身等を応化する e) 作の住持 (九例) とされ、いずれにしてもこれらを adhi-√sthā することは、その誓願に基づくはたらき (kriyā) を諸の衆生たちに示現する (ādarśana) ことと共に説かれる加持で

ある。

また最後の「作の住持 (krtyādhiṣṭhāna)」については「是中作住持者。供養門等成就集助菩提法故 (Br T26, 199a15-16)」とあり、菩薩の無量阿僧祇にわたる諸如来たちに対する供養・恭敬もまた加持の要因であることが注目されるが、この点については今後の課題としたい。

- 1) 『印度学仏教学研究』 57-2, p.1012 では無生法忍を得て、無功用なる状態であるとしたが訂正したい。無功用な状態に至った菩薩の三昧上にあることを前提として菩薩は如来の加持がよく加持されている菩薩となり、無量なる智慧の道に入る。そして「諸法本不生」という認識、即ち無生法忍を得て、第八地に止住する菩薩となり、以降、無功用なる境界から菩薩を行為主体とする加持が行われると理解される。
- 2) 詳細は拙論「『十地経』序章における anubhāva と adhiṣṭhāna について」(『密教文化』 218, 2007)。
- 3) 詳細は室寺義仁『グプタ朝期におけるアビダルマ教学とヴァスバンドウの教義解釈研究』(日本学術振興会科研研究成果報告書, 2008)。
- 4) 詳細は拙論「『十地経』第八地における adhiṣṭhāna について」(『密教文化』 220, 2008)。
- 5) 漢訳「示現種種一切佛事 (Śdh) 現佛事 (Śn) 示…一切佛事 (Br) 示…一切佛事…皆現神力 (Bb, Kj) 一切普立如来之業 (Dhr)」。
- 6) DBhS191, 6-193, 15; R90, 11-30 用例の具体的な内容は別稿に譲りたい。

〈略号〉

MsA, B Two Sanskrit Manuscripts of the *Daśabhūmikasūtra* preserved at The National Archives, Kathmandu edited by Kazunobu Matsuda The Centre for East Asian Cultural Studies for Unesco The Toyo Bunko 1996.

DBhS 梵文大方廣佛華嚴經十地品 *Daśabhūmiśvaro nāma mahāyāna sūtram* (Tokyo, 1836)

R Rahder ed., *Daśabhūmika-sūtram et bodhisattvabhūmi* (Louvain, 1926)

Dhr Dharmarakṣa (竺法護), A. D. 297 訳出『漸備一切智徳経』(10. 458af.)

Kj Kumārajīva (鳩摩羅什), A. D. 402-412 訳出『十住経』訳出 (10. 497cf.)

Bb Buddhahadra (佛駄跋陀羅), A. D. 418-420 『六十華嚴』訳出 (9. 542af.)

Br Bodhiruci (菩提流支), A. D. 508-511 『十地経論』訳出 (26. 123af.)

Śn Śikṣānanda (實叉難陀), A. D. 695-699 『八十華嚴』訳出 (10. 178bf.)

Śdh Siladharma (尸羅達摩), A. D. 753-790 『仏説十地経』訳出 (10. 535af.)

〈キーワード〉 bodhisattva-samādhi, tathāgatādhiṣṭhāna, anābhoga, bodhisattva-buddhi
(高野山大学密教文化研究所受託研究員)